

大西批判をどう思うか 日本政治思想史小レポート集約

大西瀧次郎の「出撃前訓示」や遺書に対し、「神の前にひれ伏して拝む態度をとらなかった」などの批判がなされていた。批判は、「傲岸不遜、神を恐れぬ態度は、死ぬ間際まで変わらなかった…」と続く。

私も同様に大西氏を批判したい。大西氏が特攻隊員に「皆はすでに神である」と言ったのは本音のように感じるが、それはあくまで自分の眼から見た「神」ではなく、一般国民から見て「神に値する」ということなのではないか。そして、彼らを「神」たらしめた自分も当然、すでに「神」、あるいはそれ以上の存在だと自負しているようにさえ感じる。それほどに不遜な態度である。

また、遺書の内容から、大西氏は特攻隊員に「外道を犯して悪かったとは一言も言っていない」とする記述があった。その後「彼の自決は…あくまで約束が守れなかったお詫びのしるしとしての自決であった。そういう意味の良心の呵責はあったわけだが…」と続いていく。しかし私は「良心の呵責」があったかどうかとも疑わしいと感じた。辞世の句や「百年の後にも知己を得ないかも知れんな」という発言などからトータルで考えると、彼の自決は「自分の存在を美化する」というのが第一の狙いであったように思う。その目的の為に「特攻隊員へのある意味での謝罪」を手段として用いたのではないだろうか。

彼が死に際にしたとされる、若者への説教で「日本民族の福祉と世界人類の平和のため、最善を尽くせよ」という発言がある。彼もまた、自分の誤った思想が、本当に日本や世界を幸福にできると信じていたのだろう。その意味で、彼もまさに煽動されていた人であり、その意味では同情できるとも感じてしまった。

今回の講義においては、神風特別攻撃隊の作戦を発案し、それを指揮した大西瀧次郎海軍中将に対する批判について学んできたわけであるが、この三村文男の批判は、今まで特攻についてあまり深く考えることのなかった私にとっては斬新であり鋭い内容であった。

特攻の現場において、大西中将は、壇上から生身の人間である若い部下に対して、「皆はすでに神である」と持ち上げ、そして自分も多くの命を左右できるあたかも神であるようなふるまいをしたわけであるが、これに対して三村は思い上がりであると厳しい批判を加えており、ここが私にとって特に印象に残った部分であり、その指摘は適切であろうと思うことができた。

というのも、大西のようなこういう思考形式は現在においても世界のさまざまな場所においてみられるのではないだろうかと思ったからである。

アメリカの同時多発テロにおいても、オサマ・ビンラディンやアル・カーイダなどのイスラム教過激派のテロ集団がこのテロを称賛する声明を出したりするなど、テロの実行

犯を称えることで、このテロの悲惨さを覆い隠し、死者を冒瀆するような風潮をうかがうことができた。

またイスラエルにおいて頻発する自爆テロにおいても、イスラム教過激派の集団がテロ実行犯を称え、パレスチナの街角には、テロ実行犯の写真や肖像画が張り出されるなど、こうしたテロの悲惨さをあまり感じないような風潮をみることができる。

こうした特攻や現代の自爆テロにおいてみられるのは、軍国主義や皇国史観あるいはイスラム教を過激なかたちで解釈する思想など、少なくとも当事者にとっては非常に崇高なものと思われる思想が背景にあるから、自らや他者を神のように扱うことができ、また人の命を軽々しく扱えるような行為を行うことができるのではないだろうか。またこれらの攻撃にみられる自爆というかたちの死に方は、即死であり苦痛というものがないと思われるから、自分の命も軽々しくあつかえるようになるのだろう。そして、一瞬のうちに死ぬということは、桜が散るように死ぬという、日本人にとってなじみやすい古来の思想があるから、特攻という行為につながっていったのだろう。つまり、こうした思想や美学が背景にあり、そうしたものを大西がもてあそんだから三村は厳しい批判を加えたのだろう。

このような誤った思想を注入され、また特攻をせざるを得ない環境にいた兵士らに大量殺人などの責任を全面的に帰することはできないだろうが、特攻を指揮し、それを鼓舞するような思想をふりまいた大西ら司令官の倫理的責任は非常に重いものであり、また、靖国神社問題にみられる「英霊」と死んだ兵隊を称える思想ともつながるものがあるように思われ、今回の講義で、三村の考えに触れてみることは、自分にとって良い経験であったと思う。

三村氏の「大西は無神論者である。神を前に訓示をたれる人間があるか」との批判は正しいと思う。大西が無神論者であり、思想をもっていなかったからこそ、あくまで攻撃方法の一つである特攻作戦を冷静に実行できたのであろう。「皆はすべて神である」という言葉も、特攻隊員ひとりひとりの「死に方」を称え、納得させるための手段に過ぎない。また、三村氏は「正しい国だから愛する、正しい国だから誇りをもつ、正しい国ならば守る、というものでないだろう」と述べている。大西は「正しい国」の将来を守るために、敗戦濃厚な中であえて特攻作戦を実行したとも言われているが、もしそうであるならば、それは軍人として重大な越権行為であり、エゴである。ただ、軍という閉鎖的社会的なかで中将という地位にまで上り詰めた大西にとっては、皇国日本は当然「正しい国」であり、また軍人として「正しい国」を守ることも当然であったのではないか。帝国軍人全員が「決

死」の覚悟を持っているという、大西にとって当たり前のことが、構造的に「必死」である特攻作戦を生んだのだと思う。しかし、このような歪んだ思考を実際に行動に移した大西の責任は免れない。

大西を批判する、という行為は特攻そのものを批判する事に他ならないし、それは当時の日本政府の戦争政策の全てを否定するという事ではないかと思う。その際に、大西という人物のみに批判が向けられて良いものか、と疑問に思う。ナチ政権下での行い全てを、ヒトラー個人の資質に責任を負わせようとすれば、当時のドイツの民衆が無意識の内であるにせよ、ユダヤ人の迫害に加担していたことを見過ごしかね無いのと同様、特攻という行為をより包括的に分析する必要があるのでは無いかと思う。政府しかり、それを美談として取り上げようとしたマスコミも然りである。

大西の行為や言動を、擁護し肯定するというのではなく、彼もまた当時の状況に大きく左右され、そしてその流れの中に組み込まれた一人として捉えるべきではないだろうか。その中で、特攻というものの意義、さらには回避しえたか否か、賛美した者、後になって批判する者の立場を明確にしなければ大西批判さえも、その方向を見失った議論に傾斜して行く恐れがあると強く感じた。

私は大西批判には反対の立場である。むしろ大西の提案を許可した軍令部首脳に問題があったのではないかと考える。「十死零生」という本来日本海軍が伝統的にタブーとしてきた作戦を大西が提起した時、日本海軍の作戦指導者達の集まりの場において疑問を提出した者は一人としていなかったという。そして大西が特攻作戦を提案した時、及川古志郎大將は「あくまで本人の自由意志によってやって下さい。」と言ったという。そのような責任回避の命令を軍令部は行ってもよいのだろうか。そのような命令をされたら現場責任者はやらないわけにもいかず、やらざるを得ない。それは今の日本にもいえることで、雪印や日本ハムでも子会社や営業所の行為は親会社、本社の意を汲み取っていたフシがあった。しかし雪印や日本ハムは親会社や本社が非難的になっていたのに対して、特攻作戦は現場責任者の大西だけの責任にされているような気がする。もちろん大西は絶望的な戦局を知っていたのであり、そこで何故、犬死に近い特攻作戦を行ったのかは戦争を体験していない私には理解に苦しむところである。だが「事の成り行き」で大西の特攻作戦を許したとすれば、軍令部にこそ問題があったのではないのだろうか。

当時、特攻隊による戦法をとらなければ戦局として勝つことができないまでも、アメリ

カ軍の攻撃を防ぐことができなかったことは分かる。大西中將の発言は、指揮官として当然と言えるのではないかと思う。

もちろん、このようなことを言うと残酷なことを言っているように聞こえるかもしれない。あるいは、「他人事だから、そんなことが言えるのだ」とか、「過去のことだから、そんなに冷静になって語れるのだ」と言われるかもしれない。でも、自分が軍隊を指揮する責任を負っていたら、戦局を少しでも有利にするように考えるであろう。もしそうでなければ、大西中將自身、責任が問われてしまう。もちろん、保身もあるかもしれない。しかしながら、敗退していけば、本土にアメリカ軍が上陸してしまう。そこで、苦肉の策として特攻の戦法が採用されたと考える。

その上で考えると、大西中將の発言は、発言それ自体としては戦いに行く人間たち、しかも死に行く人間たちに対してあまりに無礼であり、無神経であるが、戦う者たちの士気を高揚させるのにはやむをえないことだと考える。人間の道から考えれば残酷だが、軍事上の論理として出た発言である。いずれにしろあの時、特攻でアメリカ軍を食い止め、被害を与え、戦線を後退させなかったら、本土に上陸していたであろう。特攻の犠牲は決して、無駄に放っておらず、我々の今日の生活に生きている。その意味で、大西中將の発言は兵士を奮い立たせようとした意味で重要だと考える。先日、靖国神社に行ってきましたが、軍司令官は祀りたくないが、特攻の人々は祀られてしかりではないだろうか？

前回の授業で読んだ大西への批判は、その一語一語を細かく分析しながらの批判で、非常に説得力があり、反対意見はもちませんでした。そのような批判が出て当然であり、大西の自殺を安易に美化すべきではないということがよくわかりました。

しかし、特攻隊として死んでいった若者やその家族が大西を批判するのは当然だとしても、戦後50年以上経った今、一学生としての視線からみると、第二次世界大戦という世界的にみても大きな戦争の中で、個人の罪を問い詰めることはきりが無い話になるでしょうし、大西の性格の問題よりも、本質はもっと大きなところにあるのではないかと思います。

大西の個性よりも、なぜ大西のような人物が上級階級に存在し、力を発揮し、多くの人を動員することができたのかという社会背景に興味が向きました。もし、大西がいなかったら特攻はなかったのか、悲惨な事態は免れたのかと考えれば、決してそうとはいいきれないはずでしょう。もっと大きな力があって、大西はその中の一端のすぎなかったのではないのでしょうか。

ですから、大西を美化すべきでないという批判には賛成ですが、それ以上の個人批判は、実際戦争を体験したわけでもない私には賛同できません。

三村氏の批判は大西に対して、今まで気づけなかったことを提示してくれた。これまで三村氏の批判に触れるまでは、陸軍と海軍という比較の中で、多くの特攻隊員を出撃させておきながら、降伏後も生き続ける道を選んだ陸軍将校と、自決という、形の上では「死」を選んだ海軍将校とでは、目に見える形で特攻隊でなくなった方たちに責任を取っている（ように見えた）分、海軍への評価が高かった。しかし、三村氏の批判に触れ、それが特攻隊員を死に追いやったことへの謝罪ではなく、降伏という結果になり、自分のした約束が守れなかったことに対する謝罪でしかなかったこと、そして死に際もなお「傲岸不遜」だったことを知り、憤りを感じた。さらに陸軍と海軍という対比で考え、「死」という、人間にとって、よりインパクトの強いものに、何も知らずに傾いてしまった自分と、戦後、その「自決」を利用して海軍将校への評価を上げてきたジャーナリズムがあることに、恐ろしさを感じた。特攻隊のことを語るならば、三村氏のように「特攻の鬼子母」に対する徹底した厳しい目が必要だと思った。ただ、自決せず生きることを選んだ将校が、「死ぬばかりが責任を果たすことにはならない。それよりは後始末をするほうがよい。」と言ったことについては、それが死からか逃げるための言い訳にきこえ、彼らが生き続けていることに対して、疑問を感じるのも正直な感想です。(道連れを作らなかったことは評価できると思いますが。) 彼らの責任とは何なのか、どこにあるのかを考えさせられました。

私も最初は特攻隊を編成した挙句に敗戦し、その責任をとって自決した大西瀧次郎を美化していた。軍人としてあるべき姿であるとすら考えていた。しかしながら、講義を通して私の考えは「大西は身勝手な男であった」というものになった。特攻隊員をいかにも軍神のように奉りあげ、説き伏せていたようだが、心の中では自分にとっての呈の良い駒というぐらいにしか考えていなかったのではないだろうか。もちろんその本心をうかがうことはできないが、講義の中で印象に残った言葉は三村文男氏の「大西には『特攻の生みの親』より『特攻の鬼子母』のほうがふさわしい」という言葉である。これほど短く、的を得ている言葉はないであろう。戦争中にもこの男の毒気とでもいうべきものにあてられた者は多かったであろう。また、国自体がこういった風潮でもあったのであろう。だからこそ宇垣海軍提督の私兵特攻のようなことが行われてしまったのだと私は考えている。大西の自決は道連れを伴わなかっただけ宇垣よりはましと言えるかもしれない。

しかしながら、大西の遺書の文面には憤りを覚えてしまう。講義でも御教授していただいたが、この遺書の文面は散華した特攻隊員より高い立場にたったのものである。言っていることと実際にやっていることがまったく違うのである。挙句には国民にまで説教をしてしまう始末である。この自己矛盾に大西は気づいていたのだろうか。「神経が太い」からこういったことをしたのではない。むしろ「馬鹿」であったからこういった行為に及んだのではないかと私は思う。

ポツダム宣言受諾、敗戦は、過去から現在に至るまですべての信念・思想の死滅を意味するものであったと思われる。「ウルトラ・ナショナリズム」と呼ばれるような運命共同体である国家の敗戦による皇国思想の否定は、個々の日本人の誇りすら奪うものであっただろう。新しい平和主義や民主主義の思想は、正当性を認められつつも、過去の否定の上に成り立つ「外来」の思想として、日本人の「自愛」心を満たさないのではないか。その中で、正攻法の外道をいく殺人の方法である「特攻」が、潔き自己犠牲者として美化され、過去の体験なき後世代にも受け入れたのではないだろうか。しかも、それを「美化」する思想を残したのは、「特攻」を生み出した軍人達の「謝罪」という形での自決からである。ここに大西批判があり、攻撃者・被害者双方にとって特攻隊そのものの残虐性への指摘がある。軍人達は自決という形で、生涯その無責任なる信念を貫いたと思える。大西の遺書に関する批判の中で、「善く戦ひたり」「深謝す」とは、特攻隊の否定・謝罪ではなく、敗戦で信念の達成がなかったことへのお詫びの自決に過ぎないという。更に大西は、「日本人たる矜持を失う勿れ」と述べているが、確かに彼の信念は全く変わっていなかったと思われる。恐らく大西は、敗戦の意味するもの - 即ち、国家の過ちが日本人の「自尊」の喪失を恐れていたのだらう。我々は、ナショナリズムの全てを否定してしまったのかもしれない。公の為に私益の犠牲もあるという平和的協調、福沢諭吉のいう「自尊」=「他尊」といったインディビジュアルイズム→ナショナリズム→インターナショナリズムと繋がっていく健全性を保てるのか。敗戦という過去を背負い、特攻隊を美化することで自己愛を満たすのは難しいであろう。しかし、大西の遺書に濃厚な、軍人の規律・精神の滲み出る命令調には、ヒューマニズムの思想もみられないのである。

我々は大西批判から、軍人の手によって守られ、残されている「歪められたナショナリズム」を矯正する必要に、改めて晒されている。「特攻」が、皇国主義の犠牲であると共に残虐性をもってつくられたものであることを認識しない限り、現在の「平和主義」すら、被害者意識によるうわべの危ういものにならざるを得ない。軍人・大西に突き付けられた、「特攻」を美化する「自愛」の思想を、如何にして「他愛」につなげる意識へと変えていくかという課題を、日本人は負わねばならないだろう。

この大西瀧次郎の特攻隊への言葉は、たしかに兵士達への思いというのが軽かったように思います。それはやはり言葉の中に司令官と部下という関係の中での言葉遣いだったと思います。敬いがあるのならもっと言葉遣いが違うだろうし、文章も違うものだったはずだと思います。また自殺についても、たとえば言い訳と解釈されようとも、生きて後の始末をしなくてはいけなかったのではと思います。実際に生きて避難されながらも始末をしたり、あるいは刑罰を与えられたりとした人もいるのだから、死んでしまう事はそうした事から逃げてしまっているように思いました。

大西は生前、こんな事を言っていたそうです。「地上においておけばグラマンに叩かれる。空に舞ひあがれば、なすところなく叩き落とされる。可哀相だよ。あまりにも可哀相だよ。若ものをして美しく死なしめる、それが特攻なのだ。美しい死を與へる、これは大慈悲といふものですよ。これに対して、三村さんは「慈悲で殺されるほうは たまったものではない。人間が人間として認められる限界をこえた言葉ではないか」と 激怒しています。特攻の責任者であった海軍中將、大西瀧治郎は、特攻を「神」と呼びました。しかしそれなら何故、職を賭してでも特攻の中止を訴へなかつたのか。「神」を死に向かわせたのか。彼は腹を切ったが、腹を切っても償へない事はあると思います。私は三村さんの意見に共感を持ち、大西批判が起こることは当然のことだと思いました。

大西に対する三村氏の批判が的を得ていると思う。「生みの親」という言葉は自己矛盾に相当する、と論じているように、それは、大西の存在を美化し、正当化するものであり、当時の日本の軍部が無能で、将兵を多数犠牲にしたことが明確になるのを意図的にぼかしていると思う。大西は特攻を統率の外道と認識していたにもかかわらず、結局その戦術を採用し、多くの将兵が戦死したのだから、彼を含めた軍部が殺したも同然であり、彼を断罪すべきなのに、賞賛するのは、特攻の戦死者とその遺族をないがしろにするもので、本末転倒だと思う。

大西瀧治郎の批判について、私は誰も彼を批判できないのではないかと考える。批判されるべきはもっと上の人間、言ってしまうと昭和天皇ではないだろうか。彼の言葉を見ても、彼個人としては特攻の指示を出した事に対して後ろめたい心境があったように感じた。辞世の句にある「特攻精神を堅持し」という彼の言葉も、戦時中だったから戦意を喪失させないように、敢えて吐いたセリフのように感じるし、「特攻は統率の外道」と言っているように、大西自身は特攻指令に対して反対派だったと思う。今ちょうど問題になっている、北朝鮮拉致から帰ってきた人たちが、自分の本音を言えず、「恐くはなかった、共和国での生活は幸せだ」などと半強制的に言わされているのと同じではないのだろうか。当時の状況を想像すると、戦況的にも彼の立場的にも、大西が特攻の指令を出したのはやむをえない事だったと思う。真に批判されるべきは軍のトップ、天皇であろう。

当時の日本のために死んでいった、大西に対して忠誠心を尽くして死んでいった若者達にとっては当たり前だったかもしれない大西の言葉に対して、私は憤りを感じる。

しかし、「特攻」を出来るのは大西しかいないといった日本人の他人任せの軍人魂が、大

西を自分が上に立ってやらねばという気持ちにさせ、人の魂をもって日本を勝利に導こうとする鬼にし、そういう言葉を吐かせたのかもしれない。

大西は、人の立場に立ってモノを考えると出来なくなって、自分と日本の行く末しか頭になかったと思う。特攻で死んでいく若者の気持ち、その家族の気持ちが分かっていたら、行動にも言葉にも温かみがあふれていたと思う。しかし、大西の冷たさには、多くの人の批判と同様に許せない気持ちでいっぱいである。

特攻作戦をその頂点に立って号令した大西瀧次郎中將の遺書、そしてその大西に対する批判を読んで、大きな衝撃を受けた。

まず、「大西は遺書で特攻隊員に謝罪しているのか」ということについて、私は謝っていないのではないかと思う。謝っていないというよりも、プリントにも書いてあったように、謝ることが違うと思う。特攻は統率の外道であり、多くの者が命を犠牲にした。特攻命令を出してしまったこと・多くの青年たちを殺してしまったことに謝罪すべきなのに、大西は作戦が成功しなかったこと・特攻隊員の死を無駄にしたことを謝っているのである。外道を実行したことへの謝罪がないというのは、どう考えてもおかしい。それ以前に、「謝ったからどうなる、謝らなかったからどうなる」という問題ではないとも思うが。

また、大西の遺書の言葉についてだが、私も「大西はそんなに偉いのか。自分のことを神だと思っていたのではないか」と考えてしまうほど、横柄だと思う。大西が特攻隊員たちに言った出撃前訓示では、特攻隊員たちを「神」と称している。それにもかかわらず、大西は「善く戦ひたり 深謝す」などの言葉を使っており、最後まで上の立場に立っている。隊員たちを「神」と呼んでおきながら、部下に対する言葉使いをすることは、ただ単におだてただけなのかと憤りを感じた。そして、「特攻精神を堅持し」と最後まで特攻の正当性を述べ、今後もその精神を維持するようにと伝えていることに大西の人間としての感情を疑った。

授業を通して大西中將のことを学び、彼に対する批判に同調の意志を持った。時代背景などもしっかりと絡めながら、特攻隊や大西に関することをもっと深く知りたいと思った。

大西が批判されるのは当然ではないかと思う。ガダルカナル島撤退はアメリカと普通に戦っていては勝てないということを認識させた。アメリカに勝つためには違った作戦が求められた。それが特攻隊である。人の命を何とも思わず通常兵器のように扱ったことには言葉もない。また、二千万人特攻という馬鹿げた発言には呆れるばかりである。日本が勝つための手段としてそれを使用しなければならないほど切羽詰った状況に置かれていたのである。歴史には「もし」はないが、もしあの時降伏していたなら特攻隊は存在しなかつ

ただろう。所感でこれからの日本のことについて考えている人がいたことに驚いた。しかし、大西にそのような考えはなくそれよりもアメリカとの戦争に勝つことだけを考えていたと思う。大西の自決は当然である。あれだけのことを指揮したのだから批判されなければならない。遺書の内容をみると偉そうによくそんなことが言えると思う。

講義で大西への批判を聴き、まず思ったことは妥当であるということだ。彼は批判されるべき人間であり、その批判は当然なされるものであったと思う。大西への批判はありふれた当時の軍人への批判と違って、つまりそのイデオロギーではなくパーソナリティーに批判がなされていたことが異なる点であり新鮮に感じられた。彼は上級軍人として軍を指揮する立場にあったが、その人間としてあらゆる意味でふさわしくない人間であったと思う。大きく分けて3つ部下に命ずる立場の人間として欠けていた要素がある。1つは部下を思いやらないことである。まず特攻を命じた時点で部下を思いやっていないが、それはやむを得ないとしても、「皆は神である」と言って出撃させておきながら、彼等を全く神として扱っていない。つまり部下に対して罪悪感、感謝の念を持っていない。2つ目は自分を律することができないことだ。彼は軍人の中での地位をそのまま娑婆で演じていた。彼は地位の高い軍人の自分をそのままの自分にしてしまったのだ。それは自分にとって都合の良い部分だけしか見ようとしなからである。当然彼は傲慢でありそれは言動からも分かる。3つ目は忠義の心を持たないことである。彼の立場は特に天皇を神とし崇拜しなければならないが、「日本は負けていない天皇が負けたのだ」と言ったようにその心は無かった。むしろ自分を神と思っていたようだ。組織の管理させる人間としてこれほど危険な人間はいないだろう。これほどまでに不適切な人間が軍の上役としておさまるということは、当時の状況がよほどおかしかったのだと思う。だが現在にも小さな大西は全くないとはいえない。ぜひその悪を暴き出し正してゆきたいと思う。

天皇が神であると崇められていた時代に大西瀧次郎は自分が神であるかのごとく多くの若者の生殺と奪権を持ち、特攻の出撃を命じ、また自分も神であると信じていた。そのような大西への批判は妥当なものだと思う。そういう者の命令を受け、散っていった若者を思うと無念でならない。しかし彼の中にも葛藤があったにではないかと思う。大西は「特攻は統率の外道」といっているが、確かにそういう思いがあったはずだし最後には切腹した自決したのだから、自分は間違っていたと考えたにちがいない。切腹したところで生前の生き方が正当化される訳ではないし、死んだ後にも「切腹して当然だ」というようなことを言われるのだから、余程のことをしてきたのであろうし、それが当然の結果であるかもしれないが、大西にも様々な思いが交錯していたのだと思う。だが彼が行ったことは絶

対に間違っているのだから、二度とこのようなことは繰り返されないでほしいし、二度と大西のような人は現れないでほしいと思う。

大西が何を思い、何のために自決をしたのか、本当のところは私達には分からない。ただ、遺書の中で、本心から書いた言葉であるかはともかく、特攻隊の戦死者達に対して謝罪の言葉を述べたということや、その謝罪の言葉が生前の自分の立場を思わせる言葉遣いだった、ということは事実として捉えられる。授業で扱った、大西の横柄な発言に対する批判は、多分に説得力のあるものであると感じたが、その反面、戦争、そして敗戦という事態の中で、大西は一人の「人間」としてではなく、「司令官」として最後まで国のためになることをしようとこのような遺言を書き、自決し、また、故意的にこのような言葉遣いで遺言を書いたのではないか、と思った。というのも、戦争中に人々から憧憬のまなざしで見られ、軍の幹部であった大西が、最後の最後に、司令官としてのプライドを捨てて、国民に対して弱気な発言をする事ができるとは考えられないし、日本の敗戦・降伏を受け入れて、このような事態になったことを詫びた「言葉」の中にも、この事実を受け入れる苦しみや挫折感があったと思われるからである。たしかに、遺言の中で見られる数々の横柄な発言は、数々の大西批判の中でも取り上げられているように、無神経なものとして捉えられるに値するが、それでも常に気丈にふるまっていたであろう大西の最後の言葉の中には、人間としての情や優しさは微塵もなかったものであろうか、と考えずにはいられなかった。

特攻の生みの親とされ批判されてきた大西瀧次郎は自殺に死に際に自分の送り出した部下達との約束が果たせると言いました。それは彼がマニラで特攻隊を最初に編成した時から、すでにいつどのような方法で自らの命を絶つのか決めていたのではないだろうか。大西中将は、元々「搭乗員が100%死亡する攻撃方法は採用する時期ではない。」と当時の世界が巨大戦艦から航空機へと移っていたこと見抜き特攻思想とは距離が一番ある人だった。大西は特攻の生みの親と信じられているが、特攻という暗部を、一言も弁解せず自分一人で墓場まで背負っていくのが日本海軍史にとって最良の方法であると直感していたのであろう。彼は今まで、これからも特攻作戦の生みの親として、史上最悪の作戦の立案者、暴将、愚将と呼ばれていくであろう。しかし、非難以外に彼が最後まで全力を尽くし戦い抜く責任と、部下一人一人の生命の重さを本当に知っていた指揮官だったという面もあるのではないだろうか。批判の中にも武士道魂の凄まじさを脳裏に焼きつかされました。

今回の授業で特攻の様々な遺書に触れ、それに対しての三村氏の批判について聞き、自分なりにいろいろと考えさせられました。その中で大西瀧次郎に対する批判について考えを述べたいと思います。

まず私の本心としては三村文男氏の彼に対する批判について納得できないというものです。三村氏の批判は確かに的を得ていることは分かります。これから死を向かえ神となると自分で述べた特攻隊員達に対し、上からものを言うような形で訓示をしているという批判を聞いた時、私も確かに不快な気持ちになりました。しかし、本心が必ずしも正確に文章に表れるわけではないと思いますし、その時代、自分の置かれた立場から考え選んだ文章の形なのかもしれません。なによりも彼に対する批判は純粋にかわいそうだと思うのです。なぜかという、扇動した命令者がすべて悪く、扇動された者はただの被害者だというのはおかしいと思うのです。特攻という悲劇が二度と繰り返されない為にも彼に対する批判の必要性というものも確かに感じます。しかしそれを言ったら彼の命令を聞き、行動した特攻隊員達にも非があるように思えるのです。特攻の悲劇を作り出したのは命令者ではなく日本という国の時代であり、そこの責任には命令者も被命令者も含まれるはずで、それが個人の批判をするのは私は納得できませんでした。

大西が何を思い、何のために自決をしたのか、本当のところは私達には分からない。ただ、遺書の中で、本心から書いた言葉であるかはともかく、特攻隊の戦死者達に対して謝罪の言葉を述べたということや、その謝罪の言葉が生前の自分の立場を思わせる言葉遣いだった、ということは事実として捉えられる。授業で扱った、大西の横柄な発言に対する批判は、多分に説得力のあるものであると感じたが、その反面、戦争、そして敗戦という事態の中で、大西は一人の「人間」としてではなく、「司令官」として最後まで国のためになることをしようとこのような遺言を書き、自決し、また、故意的にこのような言葉遣いで遺言を書いたのではないか、と思った。というのも、戦争中に人々から憧憬のまなざしで見られ、軍の幹部であった大西が、最後の最後に、司令官としてのプライドを捨てて、国民に対して弱気な発言をする事ができるとは考えられないし、日本の敗戦・降伏を受け入れて、このような事態になったことを詫びた「言葉」の中にも、この事実を受け入れる苦しみや挫折感があったと思われるからである。たしかに、遺言の中で見られる数々の横柄な発言は、数々の大西批判の中でも取り上げられているように、無神経なものとして捉えられるに値するが、それでも常に気丈にふるまっていたであろう大西の最後の言葉の中には、人間としての情や優しさは微塵もなかったのであろうか、と考えずにはいられなかった。

授業の中で大西瀧次郎を知り、彼は人間ではないと感じました。人間ならば、遺書に書かれているような、無神経なことは書けないはずで。しかし、特攻関係ジャーナリズムには特攻＝悲劇という図式で片付けようとする傾向があるため、大西のことはほとんど知られていないのが現状です。そのため、ほとんどの人は大西の本当の姿を知らないのです。本当の姿を知らないから、戦争を生きた人々の声を聞いても、何も感じない。感じられない。自分勝手に特攻＝悲劇という簡単な枠組みを構築し、受容していく。こうした流れの中があるために、どうしても彼を賛美する方向に向かってしまうのだと思います。彼は特攻＝神という虚像を作り上げ、若い隊員を死へと誘導しただけに過ぎません。そして、そのことを反省もせず、むしろ自分こそが神であり、特攻が当然の行為であるかのように考えていたのです。これが大西瀧次郎です。このような人物が賛美されてしまうというのは、我々戦後の日本人に問題があるように思います。大西に対する批判は、こうした戦争が必要以上に美化されている今の状況を、改善するためのきっかけになると思います。昔のことだからと片付けてしまうのではなく、きちんと当事者の声を聞き、それを基に私たち自身が自らの問題として考えていくことが必要です。大西に対する批判は、そのきっかけの一つに過ぎません。他にも私たちが知らないだけで、隠されていること、美化されていることは相当あるはずで。それを一つ一つ考えていくことが大切だと感じました。

私は、授業で大西瀧次郎さんの自殺の話聞いた時、率直なまず頭に浮かんだ感想としては、他の陸軍の人達と比べれば潔く、責任を取った最後だと思いました。そして、この人の死がすばらしいと感じられるのもその点にあると思いました。しかし、今回この大西瀧次郎さんの具体的な行動や、批判を聞いて、その批判が正しく、最後の自殺に目が行ってしまって、そのことに気が付かないでいるということがわかりました。まず、この批判で一番に指摘する所は、遺書での謝罪の内容や、言葉遣いです。この人がいったい何に対して謝罪をしているのかというのが、はっきりとは読み取れないということや、本当に若い特攻により亡くなった戦員達への謝罪がされていないということです。この状況で、まず一番しなくてはならなかったことは、特攻命令で殺して、申し訳なかったという謝罪を真っ先にすべきであったと私は思います。

そうしなければ、特攻という必死の攻撃で亡くなった人達に申し訳がたたないと思います。また、この遺書の中の言葉遣いについても、死んで本当にお詫びをする意志があるならば、上からの立場で、下に向かって言うという言葉遣いはおかしいと感じました。この人は、死んでまでも、自分が指揮に立つ立場から、若い人達を操る権限があるかのように感じました。このことから、死んだ若者に対する心からの謝罪ではないかのように思います。

以上のように、大西瀧次郎さんに対する批判は、遺書の内容、言葉遣いからみても、も

っともなものだと思います。この人は、最後まで、尊大、権威的な態度であったということが読みとれます。大西瀧次郎さんの死が称えられるのは、メディアが英雄として取り上げていたことに原因があると思い、遺書の内容をもっと注意深く読み取る必要があったと感じます。

まず今回の大西中将の批判について、私は批判されても仕方がないことであると感じた。自分自身がもう少しで出撃する立場を経験し、また仲間を失ってしまったという怒りを三村さんが生涯忘れられるとは思えないからである。大西中将の自決の際の遺書にしても、自分の死をもって、亡くなっていった兵士たちに謝罪するという意味のものではなかっただけでなく、死してなお上官としての立場から「よく戦った誉めてつかわす」といった言葉を遺族の方達や、その仲間が知ったならば、怒り以外の何も生まれないはずである。だからこそ大西氏は戦後何年たとうとも称えられるべきではないし、むしろ批判されなくてはいいと思う。しかし、大西氏が自らを神格化し、死してなお兵士たちに謝罪をしなかったのにも私は理由があると思う。それは亡くなっていった兵士達に今更特攻をさせてしまって申し訳なかったと言った所でそれは逆に亡くなっていった兵士達の命を無駄にしたと認める事になってしまう為、最後まで自らの決断（特攻）の間違いを認めなかったのではないかということだ。いずれにせよ大西氏の決断はこれから先も批判され、肯定される事は二度とこない。

ほかの慥死するべきと思われる人が、「生きて後の始末をする」ような事を言って、自決しなかった例と見比べてみると、確かに大西滝次郎は自ら責任を取って死んでいったから、自らの責任を果たした、すごい勇気だと思った。しかし、三村文男先生や、川島先生の考えを聞き、そういう見方もあるのだと、思い返した。

司令官の言葉づかいで遺書を書き、説教染み、命令調、そしてごますりときたらこの人はかなりプライドが高いのだと思った。(自分の特攻命令で人が動くのだからしょうがないとは思うが。。)自分の主張が取り入れられず、しかも負けてしまい、意思が通らなかったために、意地になって死んだ気がしないでもない。割腹ではなく、もっと他に方法もあったらうに、(先生の話では)12時間もかかって死に、最後に「・・・天皇が負けたんだ」というあたりが、とてもいやらしいと思う。青年へのメッセージや、世界平和に関して遺書に書くあたりもかなりの理想主義者だと思う。

私自身は、大西の立場にも、特攻隊の立場にもなったことがないし、その時の状況は想像を絶している。目を合わせてはいけない、目立ってはいけないという考えに、ハッとさせられた。

大西は特攻隊を送り出す立場であったが、それは、その上からの命令、またその上からの命令またその上、とあったのだろう。特攻する青年を選んだのは大西。そこで、大西が殺人を犯したことになるのかは私にははっきりとは分らない。特攻隊で死んでいった、今の私を同年代の人々のことを思うととてもつらい。

三村氏の言葉で最も印象に残ったのは「親といたければ鬼子母と言えればいい」という節で、確かに青年たちを産んだ実の「親」達は、大西を鬼と思い憎む光景が頭に浮かんできた。ただ私が大西の言葉の中で最も違和感を覚えたのは、「神であるから欲望はないであろう」という一節であり、どうして神は欲望を持たないものと断言するのか。

特攻隊を指揮した大西瀧治郎は彼がもたらした犠牲から考えて、どのような責任のとり方でも批判を受けるであろうが私は私兵特攻によって新たな犠牲を生み出すかもしれないかった宇垣よりはましではないだろうか。

また大西の特攻隊員に対する言葉使いに着目し、神となった隊員に対して訓示をすることを批判した点はなるほどと感じ、素直に賛同できました。

大西や宇垣が美化されるのは、陸軍の上官たちが戦後さも当たり前のように生きているのに対し、海軍の上官であった彼らは死んだという事実からです。戦後も生きた陸軍の上官菅原でさえも悲劇の人物に仕立て上げてしまう特攻関係ジャーナリズムの鉄則からすれば、死をもって償った「ように見える」大西や宇垣は、陸軍の上官たちと比べてはるかに美しい「ように見える」からなのでしょう。ですが、そう見えるのは、彼らの「自己演出」の結果であり、それに多くの人間が騙されているに過ぎません。

大西の遺書や数々の発言を見る限り、彼は明らかに「特攻という悲劇を作り出した自分」が「死ぬ」ということを「演出」した自分に酔っています。大西が自分をキレイに見せようとしているのがありありとわかります。先生がおっしゃるように、こういうことを考えている大西は、もう一度、馬鹿な命令を繰り返しかねません。

死んだ人間を悪く言わないようにするという雰囲気は少なからずあるとは思いますが、何故死んだら「いい人間」ということになってしまうのでしょうか。特攻という名の殺人を犯した大西が自決したことなど少しも偉くはないし、格好良くもありません。さらに、ジャーナリズムの中には、「悪とされる行為をした人にもその決断に至るまで実は隠された苦悩があったのだ」というようなことを作りたがる傾向があるような気がします。その観点にのっとって大西という人物を伝えれば、ほとんどの人は、「大西はなんて潔い人間なんだ」と思い、大西の「自己演出」にまんまと騙されることでしょう。情報を受ける側は「悲劇」の方を好むので、そう作った方がジャーナリズムとしても好都合です。「自己演出」し

ているのは大西だけではなく、悲劇の人物を作り上げるジャーナリズム自身もまたある種の「自己演出」をしているのではないかと思います。

やはり特攻隊の若者の「死」に対して大西は上官として純粋に敬意を表しているのだと思う。特攻作戦の指揮をとることによって、若者の生殺と奪権を握ってしまった大西は、その世界では神であっただろう。そんな力を持ってしまった大西は、どこか迷いを持ちながら、大袈裟な演説をする。それは若者への言葉ではなく自分を信じさせるための言葉だったと考えられる。遺書もまたそうであろう。若者の命はとても自分の命で償えるようなものではない。しかし、戦時中の規律でものを考えると、上官として大西はあのような遺書を書くことしかできないし、後世の我々が今の基準で、それを横柄だと批判することはできないと思った。

私は前回の感想の際、特攻を統率の外道とした大西中將を称賛していたが、今回の大西批判を通じて、大西に対する称賛の念は消え、大西の狡猾さ、したたかさを強烈に感じた。さらに、大西の遺書からは、責任逃れとも取れる記述が見られ、憤りを覚えた。

大西は、自ら死地へと追いやった特攻兵達に対して、微塵も申し訳ないという気持ちを持っていないように思う。当時の情勢から判断すると彼らの死は仕方のない、運命だったかの如き認識でしかないのではないだろうか。だからこそ、自らの死後も「特攻精神を堅持」せよなどといえるのだらう。この期に及んでまで特攻精神の堅持を訴える大西には、外道を犯して悪かった、特攻命令で殺してすまなかったという謝罪の気持ちがないことがここで改めて分かった。最期の最期まで特攻命令の正当性を訴えるのは、大西の海軍中將としての、空虚で醜いプライドでしかないのではないだろうか。

大西批判を通じて、大西にとっての統率の外道とは、人倫の外道ではなかったことを痛感させられた。そして、そこには私がかつて大西に抱いた理性あふれる人間らしさはなく、大西の殺人者としての冷徹さが強調されているように思う。

大西の遺書を見る限り、彼の自決について何ら批判されるべき点はないと私は感じた。勝利を信じ「散華」していった部下たちへの感謝と、その信を司令官として達成させられなかったことへの謝罪を、死をもって示そうとしたその意思がどうして咎められようか。批判文の内容には納得のいく部分もあるが、そうでない部分も少なからずある。確かに、海軍中將といえども「娑婆」に出ればただの人であり、遺書の中の訓示をたれるような文面に不快感を示す者もいるだろう。しかしこの批判者はそのさらに上を行く説教者である。

まず、英霊たる死者に対する大西の不適切な言葉遣いを指摘しているが、批判者においても、もはや数十年前に書かれた遺書に対し丁寧にも適切な文例まで提示している。この適切とされる文例と不適切とされる大西の遺書を比較するも、私にとっては大差のない文章にみえる。文例のほうは表現が曖昧としており、その真意をつかみかねるとというのが正直な感想だ。さらに私が指摘したいのは、批判者の主張が自身の感情、好み、また単なる仮定に基づいている点である。資料が極めて不足している問題を取り上げるだけに止むを得ないことと思うが、そうであるからこそ、痛烈な批判を著し、多くの読者を納得させることは困難だと心得てもらいたい。

『当然です』

人の死に対しこういう言葉が出でくるのに驚きました。

その逆に、彼の死をたたえる人が多く存在していることにもまた、ショックを受けました。1人の人間の死、しかも自害に対して他人が批評をするということに対し私は強い疑問を感じています。それにより明らかになることがあるから、多くの人の興味を引くことになったのでしょうか。しかし親族のことを考えると赤の他人がなかなか口にできる議論ではありません。ともかく「大西の批判をどう思うか」。まず自決に対して私は「彼にとって正しい道であった」という意見に賛同します。彼にとっては一番良い幕の閉じ方だったのではないのでしょうか。それは実際多くの人からたたえられていることから推測できます。しかし私の中では高橋保男さんの意見に頷けるところが大きいかもしれません。

死んで当然の人間はいないというのが私の考えですが、まず1つに戦時中は私の想像を超えたものであり、「今更自殺が罪悪だ」という道徳は、ここでは通用しない時代でした。人の死や遺書に対して多くの人がここまで批評をしたとしても何の抵抗も感じないのもそのためでしょう。この時代の自害は責任をとる手段の一種であり、大西自身約束を守れなかったことに対して自決という道を選んだことは正しい選択であったといえます。そして2つめに、大西自身、人の死に対して無関心であったのではないかと感じるからです。フィリピン決戦出撃前に、大西が特攻隊に向けて言ったセリフは実に無神経であったと言わざるを得ません。「自分自身が神だと思っているのだ」という先生の言葉も頷ける訓示でした。その訓示を受け最期を迎えていった特攻隊は果たしてどんな心持ちだったのでしょうか。遺書を見ても上からものを言う態度は変わっておらず、更に外道には触れていません。「深謝」の矛先も上述したように約束を守れなかったことのみです。彼にとって一体「特攻隊」とはいかなる存在だったのでしょうか。

「鬼子母」と例えられる大西ですが、逆にそういう役でいなければ特攻隊の中將は務まらなかったのかもしれませんが。特攻の戦果は実に「素晴らしい」ものでした。しかしその半面、日本軍が失った多くの命は何物にも代えがたいものだったのです。大西自身それに

気付いていたかどうかは、残っている資料からでは判断するのは難しいでしょう。「鬼字母」であった裏で本当は「親」としての葛藤もあったかもしれません。本人がもう語ることが出来ない分、このような許容の余地も生まれてきます。これが3つめの理由です。

大西の自決は人によって捉え方が異なっています。意見が両極端に分かれていることからわかるように、それはもう答えが出ることはなく、言ってしまうと本人しかわかることの無い大西自身の気持ちなのです。ですから様々な批評が飛び交う自決は「彼にとって」正しい選択であり、誰にとっても良くも悪くもないものなのである、と私は考えました。

特攻の思想を聞いてふと思ったことがある。命令、必死の覚悟、どこかの国を何となくだが照らし合わせてしまうのである。北朝鮮である。情報の規制、国民への統制、主権者への絶対服従など北朝鮮の状態は戦前の日本と同じとは言わないが、それに近いものがある。拉致問題で次々に明かされていく北朝鮮の内情を見ると、戦争が起これば、北朝鮮は特攻さえもしてくるかもしれない、そう感じさせるのである。大西瀧次郎の文章が語句等を少々変えて北朝鮮のものと書かれてもそう違和感はないように思えてしまう。

「大西批判」を考えていて、引っかかるのが彼の思想である。聞けば特攻自体にそれなりの思想はなかったという。戦後アメリカに馬鹿にされないためとか、少しでもアメリカにダメージを与えるにはどうしたらよいのかというギリギリの選択の果てであるそうだ。これは、アッラーの神を絶対とするイスラームの思想を背景にしようとした9:11のテロとは違うと思われる。大西はまた講義では、無神論者であると説明された。ということは、神に対して敬意を払っていないことになる。説明によれば、負けたのは日本ではなく天皇であると。あの天皇制イデオロギーの時代、天皇に対してそう考えていたということは、彼は誰に対して責任を負っていたのであろうか。

責任というと日本の戦争責任であるがこれはますます曖昧になりそうである。先日、昭和天皇とマッカーサーの会談記録が公開されたが、天皇は自身の戦争責任に対しては結局のところ、言及していない。天皇によると明らかに責任は軍部にあると言っている。ただ本講義で私の自信から確信に変わったものがある。それは海軍首脳部の戦争責任である。海軍はとにかく軍部より暖かい目で見られやすい。しかし、そうではないということは頼瀬厚氏などの様々な有識者の間で明らかにされている。そして、海軍中將という地位にある大西からのこの言動である。海軍が戦争に対して穏健派であるとは到底考えられまい。

講義中のレジュメにあった三村氏の『正しい国』という言葉は、海軍中將という立場ながら特攻を意のままにできた大西とそれを可能にさせた日本の戦時体制とそれを反省しきれていない現在の日本を批判しているようだ、と、未だ「戦時体制」である北朝鮮の方角を見ながら思った。

旧約聖書の中にこのような言葉があります。「太陽の下、更にわたしは見た。裁きの座に悪が、正義の座に悪があるのを。」(コヘレトの言葉3章16節)私は特にキリスト教を信仰しているわけではありませんが、今回大西瀧次郎の自決について考えた時私の脳裏に浮かんだのはこの言葉でした。遺書を読み、その当時は「正しい」と受け入れられていたものの中にも必ず「悪」が潜んでいるのだということを感じます。

授業の中でも触れた様々な大西批判には、言葉遣いが最期まで命令調であった、というものがありました。今現在の若者の一人としての私が察するに、その中には大変な葛藤があったのだと思います。確かに批判の中にもあったように、自殺という行為は無責任であるといった捉え方もあると思います。私も目には目を、という考え方はあまり好きではありません。そこからは何も生まれないと考えるからです。しかしあのような遺書を残し死んでいった大西瀧次郎に対しては、批判を読んだ上で私はあの遺書の文面とは裏腹のもう一つの、やはり一人の人間としての彼の感情の流れを感じました。これはやはり様々な批判に触れることで理解できたものであり、大変貴重な体験だったと思っています。

戦後、日本国内において戦争の評価はこうあるべきだとか、特攻に対する悲劇的な評価をすることが一般的であったなかで、三村文男の果たした役割は大きいと思う。「正しい国だから愛する、正しい国だから誇りをもつ、正しい国ならばまもる、というものでもないだろう」とあるが、愛国心という言葉の意味について考えさせられた。

大西瀧次郎が特攻隊員を本当に神とは思っていなかったのは確かだと思います。今まで命令していた側の人間が急に相手をおだてる時は何か魂胆がある時であり、この場合は何とか隊員を死地に追い込む必要があったため神ともちあげたのでしょう。そのため、自分自身が最初に特攻に行く事も無く、最期の遺書も帝国軍人としての上から命令する形になったのです。また、部下を特攻で死なせておきながら、自分自身は特攻ではなく割腹自殺したということも自分を特別視していた証拠ではないでしょうか。

日本軍上層部に存在した、この自分は上の立場にいるという考え、そして自分は特攻に行かなくてよいという考え方が非人間的な特攻を生み出し、日本の降伏を遅らせる結果を生み出したのです。これは現代でも気をつけるべき考え方であり、このような考え方による圧力による間違いが二度と起こらないようにするにはどうすればよいのか考えてみる必要があると思います。

大西瀧次郎というこの男、私は当時の軍人、日本国民としてはふさわしい最期であった

と思う。そして部下たちに対する言葉でも、決して全てを批判されるようなものではなかったと思える。現代の価値観や観念では確かに批判されるだろう。どんなに特攻を否定していたとしても、結果的には人をほぼ直接的に殺めたということになるし、上からの命令であったとしても許されるものではない。当時の部下たちが大西の謝罪の言葉を、焦点がずれていて見当違いのものと感じるのも無理はない。私が同じ立場であっても、同感しただろう。この文章を読んでいる限りでは部下に対しての謝罪というよりも、国に対して敗戦を詫言っているように思わせる。しかし、当時の軍国主義的思想、先生や両親など大人を敬うような教育をしている状態を考えれば、これも納得のいくものではないだろうか。大西もその教育の「被害者」であり、部下に対し「お前たちは私、つまり上司を敬っている」という思いが意識的にしても無意識的にしても持っていたとしたら、下手に出て謝罪することなど考えられるだろうか。当時の上官軍人が部下に対して「国宝」と言ったこと自体私は驚かされる。決してごますりなどではなく、部下に対して心から最高級の賞賛をしたのだと言えるのではないかと私は思う。

大西の遺書への批判はともかくとして、結果として戦後の日本人は大西の言う「特攻精神」をもち、産業戦士となって復興と経済成長を成し遂げた。良いか悪いかではなく、現実として今日の日本という国は、戦前からの右派の伝統のもとに運営されている。岸信介の例のように、戦争を主導した人間たちは戦後日本の発展も主導したのである。現代の日本においては、多数派の政治組織もほとんどの大企業も、その思想は右的な保守主義である。そのような勢力によって現実に支配されている社会に、これからコミットしていこうとしているのが、われわれ学生である。そのような存在である学生の一人として、私は「特攻精神」を単純なかたちでは否定できない。日本社会の構成員たるには、何らかの自己犠牲と自己喪失の精神を要求されることは必至であろうから。

大西瀧次郎が特攻作戦を決定したことにより、多くの人の命が奪われたことは事実である。大西は最終的には自決をしたが、それだけでは済まされないと思う。大西が特攻作戦を決定した時、はたして特攻作戦を実行することにより、勝利を確信していたのだろうか？勝利の可能性が全くないのに、特攻作戦を実行したとは考えがたいが、私は大西は勝利の確信をしていなかったのではないかとと思う。それは、当時の戦況を考え、そして相手国と日本の戦闘機の数、兵力、資源量などを考えれば日本の勝利の確信などないということは明らかだと思う。いくら特攻作戦を実行したとしても、相手に与えるダメージはそれほど大きいものではないと思う。その状況の中で大西は、特攻作戦を決定したのだから、これは許されるべき行為ではないと私は思う。しかも、大西の遺書の中で、大西は特攻命令で

亡くなった人に対して謝っていない。このようなことから、私も大西に対する批判には賛同するし、大西のやった行動は許せない。

大西瀧次郎は批判されて当然のことをした。そこをまず踏まえたとき、比較的批判がおとなしい(目立たない)のではないかという思いがした。マスコミ報道によって特攻が美談にされてしまったことがその一因であると思う。

講義を聞き終えて私が感じたのは、大西は「外道」を始める際にも、たいした思想も持っていなかったのだから、それが終わったときにも本質的後悔及び反省ができないのも仕方ないのだろうという大西に対する諦めであった。そして、B4の両面刷りプリントの遺書に対する批判にはおおいにうなずけたが、結局このような深い考えがなく何もわかっていない人によって多くの若者が必死の作戦に送り込まれてしまったことがわかってしまい、それはそれで特攻に意味を持たせたい、少なくとも無意味だったと思いたくない人に真実を知らせてしまうという一種の残酷さを持っているのを感じた。しかし、いずれにしても、それが真実である以上、大西自身と大西が自決したからよしとする(正しく責任を取ったとする)単純かつ無責任な議論をする人をもっと徹底的に批判していただきたいという思いを抱いた。

大西瀧次郎の自決について色々な所から批判が出ているが、私はその批判について少し疑問を持った。なぜなら彼は最後まで特攻隊として最後まで神に忠誠を誓い、自分に与えられた任務を全うしたいとの思いが強かったからではないかと思う。だから戦争が終わって特攻隊員に対してせめてもの償いが自決ではないだろうかと思う。やはり戦争が終わって特攻隊の部下が戦死しているのに自分だけのこのこと生きていくということは大西にとって最大の屈辱だったのではないか。たとえ生きていたとしても一生、特攻隊員を殺したのは自分だということを背負って生きていかなければならない。そのようなことならいっそのこと自決した方がましだと思ったのではないか。当時の状況下では自決することしか選択肢がないと言っても過言ではない。必死になって絶対に戦争に勝つという命題を達成できない以上、その責任を果たさなければならない。一番苦しかったのは大西中将自身ではなかっただろうか。大西中将の自決を見て分かるようにあの自決には精神性ということが垣間見えてくるのではないだろうか。大西中将の自決というものが現代に生きる我々に何かを訴え続け、我々はその何かを追究しなければならない。

私は授業で大西に対する批判をプリントで見たり、先生の話聞いていても、特に特別な感情は湧いてこなかった。それは、特攻で家族や身内、仲間を失った人にとって、特攻命令を下した張本人である大西中将はまさに憎むべき存在に違いないわけで、いくら部下

に特攻に行くようあおるだけあおって、結局最後には自ら死をもって自らの責任を果たすことができなかった陸軍の菅原中將のような存在が、戦後大西と比較され、非難の対象として存在したといっても、彼のしたことを評価する人間は誰もいないと、私は思うからである。しかし、彼に対する批判を読んでいて、少々気になったことがある。それは彼の死が、特攻で若い兵士たちをたくさん殺してしまったことに対する責任としての死ではなく、あくまで特攻で死んだものの達の命を無駄にし、敗戦という事態になってしまったことの対する謝罪の意味での死であったというところである。その根拠はプリントによると、彼が特攻で必死を運命づけられた兵士や、特攻で亡くなっていった部下といったまさに神(特攻隊の英霊)ともいべき存在に対し、尊敬の意を示さず、あくまで上司が部下を見下すような語り口調で、遺書が書かれているからということのようだ。確かにそう考えるのも当たり前なのかも知れないが、私はたったそれだけの理由で、彼の死の理由を断定してしまうのは良くないと思う。私の思うに、やはり彼自身の心の中にも、自分の部下を自分の命令によって、死に追いやってしまったことに対する罪悪感があった。その根拠を遺書の文面からは読み取ることは難しい。がしかし、いくら当時の大西の心情を表している貴重な手がかりだからといって、残った遺書だけでその当時の大西の本当の気持ちを推測することは、難しいということもいえる。ましてや大西は海軍の中將という立場なのだから、一般青壮年の手本になるべく行動しなければならず、その後の天皇制国家の存続、反映を第一に考えた行動、行為を考え行わなければならなかったはずである。したがってあの遺書だけで彼の気持ちを推測し、批判することはできない。彼は、自分の命令で必死の戦闘をおこなった部下達に心から敬意を払っていたと思うし、彼の死の中にはその部下達の死や残された家族に対する謝罪の意味も、コンテクストとして含まれていたに違いないと私は思う。さらに突っ込んでいうならば、私は彼が自分や陸軍の名誉を守るためや、戦争に勝てなくても負けないということがどういうことなのか示すために自害したわけではなく、自分を信じついてきてくれたのに、特攻命令を下し、結果的に自分が殺してしまう形になった部下達に対し、死んで謝りたい、死後の世界で謝罪したいという気持ちがあったからこそ、死を選んだのだと思う。その根拠は何かと聞かれても、答えることは難しいが、戦後生き残った特攻を指示命令した人間が、自らの罪の意識に絶えかね死を選択したり、今も心に傷をおって生活しているという話からも容易に想像がつく。いくら「統率の外道」と呼ばれても、大西も我々と同じ人間なのだ。私達の先祖の中に自ら招いた他人の死を、何とも感じない人間はいないと思うし、そうであってあってほしいと思ってやまない。

大西に対する主な批判は、特攻を生み出した事、特攻により大多数の命を奪った事、そして隊員たちを神としながらもその神より偉そうに訓示した事などである。資料では痛烈にこれらを批判している。確かに「決死」の部隊を編成し、それを指揮したことは非人道

的であり、民衆の感情を逆撫でする物だ。若い隊員たちが戦死していったのに、彼だけ生き永らえたのならどんな非難が沸き起こったことか。しかし、軍事に携わる者として「いかに我が方の被害を少なく、的に多大な損害を与えるか」という主題を考えるのは至極当然である。もちろん、特攻を肯定するわけではないが、これもまた一つの手段と結論に至ったこと自体はあまり攻められない。資料にある大西批判は感情として理解し得るものだが論理としてはいささか揚げ足取りになっている面を否定できないと思う。

大西瀧次郎に対して私が抱いていた考えは、批判的なものではなく、むしろ賞賛に近いものであった。初めて彼の遺書や訓示に触れた時、次のように感じた。確かに生身の人間が、神となった特攻の英霊に対して言う言葉ではないと思った。しかしもとより傲慢不遜な彼の気質と、軍隊という上下のはっきりした組織において中將という雲の上のような地位にまでのぼりつめたエリートである、と言うことを考慮すればあまり疑問には思わなかった。責任を逃れ生き延びようとした指導者が多かった中、多くの部下を特攻命令で殺してしまい申し訳なかったという思いから、潔く特攻の生みの親としての責任を取り自決したのだと思った。しかし先生の講義において、今まで触れたものとは違う資料を提示されたことにより、これまでとは違った見方をする必要があると感じた。三村氏の批判は厳しいものである。大西は英霊である旧部下を、自らが出した特攻命令で殺してしまったことに責任を取って死んだのではない。絶望的な日本の危機を救うのは特攻しかないと言って若者達を送り出したにも関わらず、敗戦という事態となり、部下達の死が無駄になってしまったことに責任を感じ自決したのだ、という見方にはっとさせられた。大西は、特攻を統率の外道であるとは思っても、絶対に犯してはならない、人の道からはずれたものであるとは捉えていなかったのだろう。そう考えれば、自らの死後も「特攻精神を堅持し」とその正当性を主張したこともつじつまが合う。敵に最後の意地を見せ付けてやれと言わんばかりの二千万特攻の進言を、男としての意地であると感じたり、特攻の責任を一身に背負って死んだ暴将としての潔い最期であると捉えていた自分が恐ろしい。私を含め多くの人が、人としての道はずした大西の本質を捉えられず彼を賞賛したことを、恥じるべきであろう。

私は特攻隊の『生みの親』といわれる大西瀧次郎についてのこのレポートを書くに当たって、大西についてもっとよく知ろうとインターネットで検索をした。驚いたことに、大西を賛美するものが数多くあった。たとえば“大西は最後まで全力を尽くし戦い抜く責任と、部下一人ひとりの生命の重さを誠に知っていた卓越した指揮官だった”。(<http://www4.synapse.ne.jp/seikeikyoku/main>) 果たして大西は生命の重たさを知ってい

たのだろうか。人間の尊厳はどこにあるのだろうか。例え、若者が自ら志願して特攻出撃を申し出たとしても、人間の尊厳を否定する行為だと説得し止めさせることが、司令官として、人間として、あるべき姿ではなからうか。やめさせなかったことは、人道にそむく行為ではないだろうか。三村文男の言うように、大西は『特攻生みの親』より『特攻鬼子母』のほうがふさわしいと思う。私は大西の人間性を疑わずにはいられない。人間というより鬼なのかもしれない。遺書で、英霊に対する言葉使いはとても人間が神に対し使う口の聞き方ではない。大西の中で、自分という存在は何だったのか。神の上に立つ神なのか。大西は無神論者ではないか授業で聞いたが、ならば神のように振舞う自分は何なのか。私は、大西は世界が自分という存在によって動くと考えていたのではないかと思う。私は若者に向かって自ら命を捨てろという非人道的な行為を考え出した奢り高ぶった大西を決して憧れもしないし、賛美もしない。私は三村文男をはじめとした大西批判に賛同する気持ちのほうが絶対的に大きい。

どう思うか判断に困ります。自分が大西氏の立場なら心がきしむ思いをするでしょうし、逆に三村氏の立場なら大西氏を批判したい気持ちもわかるような気がします。もし大西氏が威張っていなければ、三村氏は大西氏を少しでも許したのでしょうか。それとも、多くの若者を特攻で死なせたため、絶対に許さない構えなのでしょう。

大西氏は「百年の後にも知己を得ない」と自ら言っています。だから、他の軍人の方が大西氏的心情を察してたたえるのに対して、三村氏が大西氏の批判をするのは、しごく真んな気もします。

大西瀧次郎が出撃前の特攻隊員に対して言ったという訓辞はとても衝撃的だった。特攻隊員は出撃するまえからもうすでに神であるという。そんな「神」に対して敵艦に突撃せよと命令する人たちはどれほどに「偉い」存在なのだろうか。人間はいつから神に命令できるような存在になったのだろうか。

「2000万特攻」や「勝たぬまでも負けない」など大西瀧次郎の発言は今の時代に生きる私にとってはとても理解しがたいものばかりだ。当時の人々にとってこれらの発言はどう受け止められていたのだろうか。当時の人々もこれらの発言を馬鹿げていると思ったのだろうか。でも当時の状況を考えれば例え馬鹿げていると思ってもそんなことを口に出せるような人は誰もいなかったらう。そんな発言をした大西自身も本気でそんなことを考えていたのだろうか。それとも彼自身の立場上そんなことを言わざるを得なかったのだろうか。

「特攻」という言葉を聞くと、若くして戦争で死んでいった青年たちの悲劇が思い浮き、それから、この講義で知った大西瀧治郎の最期を連想する。一つの言葉から導き出されたこの二つのイメージは、同じ色彩を帯びているようで、実は相容れない何かを持っているのかも知れない。

大西批判については、確かに「特攻」に関する文献やインターネットなどを調べても、大西個人に対して全面批判しているものは見当たらない。むしろ、「特攻」という作戦に踏みきらざるを得なかった大西に対して多分に同情的である。しかしそれも、もし大西が終戦と同時に自殺を遂げていなかったならば、全く違った結果になっていただろうと予測がつくのである。

日本人は判官びいきというか、死んでしまった人間に対して寛容なところがある。大西に対しても、その特性が出てしまっただけなのだろうと思うが、実際に軍の命令で戦友を亡くした人間と、今の戦争を知らない人間とのあいだには、その認識のしかたに計り知れない溝があるのだろう。

前の授業で知った、大西対するカリスマ性の強さが、この大西の自決やそれに対する解釈にも大きく影響していることがよくわかった。

三村さんの批判意見を聞くと、なるほど確かにそうかもしれないと思う。特攻隊員として亡くなっていった者たちに対して、なんとという無神経さだろうと思う。しかし、私がいあの時代に生きていて大西の下で特攻隊員だったとしたら、三村さんのような批判的な見方ができたと思う。私は多くの人が理解したような肯定的な見方で、彼の自決を受けとめていたのではないかと思うのだ。

また一方で、自決した時の大西の気持ち、遺書を残した時の大西の気持ちを想像してみる。彼は遺書に対してこのような批判を受けるなどとは、思ってもみなかったのではないだろうか。これを書き上げた時、彼自身はおおいに満足感を得ていたのではないだろうか。当時の彼に対するカリスマ性を考えれば、当人もこれが一番自分にふさわしい、皆に認められる責任の取り方だと思っていたに違いない。

実際、陸軍の生き残りの人達が、海軍のトップがこのような形で自決したことについて、うらやましいという感情を残している事実を知れば、この考え方は私の中で一層強まる。三村さんが指摘されているような大西の身勝手さ、神より上の立場に立った言葉や無神経さは、もちろん落ち付いて考えれば確かにその通りであり、するどい指摘であると思う。

しかし、せっぱつまった状況の中、大西のようなカリスマ性を帯びた軍人の存在は、これから身を投じる若者たちにとって大きなよりどころであったと思う。彼が殺人罪をわびるのでなく、ただ勝利という約束を果たせなかったことに対して自決をしたという点が取り上げられている。また、大西自身の中に特攻作戦を実行してきた事に対するやましさが

あったからこのような突拍子もない次元で話ができたとする意見もある。しかし、カリスマ性を帯びた人間は時としてこのような態度に出るものだと私は思う。自らがトップであることを自覚し、特攻隊員を動かす権力を自覚していなければ出てこない言葉が次々に出ているが、このくらいの自己陶醉がなければ、カリスマ性を保つことはできなかったと思う。

むしろ、この大西の自己陶醉があったからこそ皆は付いていくことができたのだと思う。大西の態度について一概に批判はできないと思う。

この世にいない大西の真意を知るとは困難なことだとは思いますが、彼の遺書を見る限り、最後まで徹底抗戦できずに敗戦となったことに対する司令長官としての責任と、特攻によって多くの若者を死なせてしまったという人間としての謝罪の両方が伺えるように思う。だから、「殺してすまなかったといっていない」という主張は誤りのような気がする。そして、大西は切腹によって特攻を作り出した責任と特攻隊への謝罪に変えたのだと思う。また、「皆はすでに神である」と言っているが、特攻隊への言葉遣いや遺書の語調が命令調だったのは、当時彼は指令長官だったわけだから、その立場で最期まで毅然とした態度を特攻隊に示したかったのだと思う。でなければ、とても特攻隊の司令長官などできなかっただろう。そして特攻隊の若者達もそんな大西だから特攻に向かっていったのだと思う。